

法政大学・早稲田大学・筑波大学等の学生が農村集落の協働作業を実施

<石川県>

市町村・集落の名称	羽咋市 神子原地区(千石町・菅池町・神子原町)
協働の相手(企業や大学等)の名称	法政大学・早稲田大学・筑波大学他
仲介者・コーディネーターの名称	
働のポイント	当初、集落の町会長の協力は得られず、受入農家が見つからず苦労した挙句、「今年から農業委員は受けることになった」との言葉を信じていただいた農家に女子大生を受入、仮初の親子(烏帽子親子)となってもらってから、理解と周知が進んだ。特に夜の酒盛りは、受入した農家だけが賑やかになったことから「来年はぜひ我が家に」という声も出た。
協働のきっかけ・経緯	平成17年度、夏季期間で受入した女子大生が大学で「盃を交わし親子になった」と教授に話しかけ、翌年から法政大学国際文化部の堀上ゼミの生徒全員が宿泊するようになってきた。しかしながら、当時の町会長が町役員に大勢の学生が来ることを説明していなかった事が二日前に判明し「田舎に泊まろう」を実施することとなった。農家と交渉し、集会所には寝泊りだけはできるが、お風呂や食事は提供できないというルール決めをした。
取組の具体的な内容	宿泊できた学生は、翌日農家と一緒に何を行うのかなど作業は全て交渉して決める内容となっている。全員が一同に集まる日時だけは決めてある。全員での協働作業(生活道路の草刈、水路清掃、農耕、種まき、農地整備、竹の切り出し)を行う。今年、36名もの大学生(法政・早稲田・筑波等)が28戸しかない菅池町に宿泊した。大学生には毎年1～2つのミッション(直売所に売れる商品開発とアイデア)を与え、集落会館で大学生の発表と交流会(宴会)を最後に持っている。
農村地域への効果	限界集落といわれる農村にとって都市部の大学生は「風」となって大地(農村)を吹き渡る。それ自体が集落にとって刺激となり、元気になってくる。農家の皆は「学歴があるけど生活の知恵(縄の掛け方など)がない」という言葉が示すように、未熟な大学生を受け入れることによって、農家が知恵を教える立場となり、気に入ると自分の烏帽子として彼らの面倒を見始める。この仮初の親子関係は、開始以後数年間継続し、社会人となった今日ですら宿泊に来ている。また、冬場の受入では、大学生達は「夏にお世話になったお礼」として毎年、3月3日に巨大(40m×100m)な雛人形を棚田に作製するようになり、神子原(菅池)のひな祭りとして定着し、毎年、1000名～1500名の見学者を限界集落で受入れている。 また、大学生の受入によって他県から30代の移住者もスム

	ーズに集落に受入られるようになり、平成17年4月段階の高齢化率57%が現在では、51.5%まで改善されてきた。農家は毎年大学生が来るのを楽しみに待ち望んでおり別れには「元気にいてね」と互いに声を掛け合っている。
都市部の主体(企業や大学等)への効果	「携帯はつながりませんでしたが、心はつながりました」(平成18年夏季)という言葉を残していった大学生もいる。隣に誰が住んでいるのかも知らない希薄化した人間関係の都会から、濃厚な人間関係、場合によっては親子になる集落生活によって、心が育てられ、親族以外に自分の事を心配してくれる里親(烏帽子親)が見つかったと言われ、過疎集落と大学生の役割を卒業研究の対象とする者まで出てきた。
仲介者等の役割	
今後の課題	大学生の旅費は全て自費で当市まで来ている。また、市側としても財政難で殆ど支援ができない状態である。こうした事業に対し、国の補助・支援対策が何としても欲しい。 また、大学との協働という集落の持続可能な発展のための方針が求められており、無制限に受入人数を拡大することは現状では出来ない。ある程度の制限、都市と農村との持続継続的な関係構築のルールづくりや、奨励するための国の支援策、あるいは大学と集落との無理のないWin-Win関係構築のための「奨励経費(旅費・通信費)」を制度化してもらいたい。
関連事業(国・都道府県等)	国土交通省 若者の地域づくりインターン事業(H17・H18)

(活動状況写真等)

